

たけさと ちめい
武里の地名(下)

各村(現在の大字)の地名については、埼玉県地名誌(蕪塚一三郎著)にらつかいちさぶろうによるとつぎのように解説されている。

〔二の割〕古くは一披目、あるいは市割目と書いた。村社香取社の鰐口には「新方庄一披目香取大明神鰐口享徳三年(一四四四年)本願末太郎」とあり、同社の縁起には市割目と書かれている。

一の割の名は、江戸時代に広く行なわれた割地制度の遺名で、部落共有地等の期間を限った割地をさす。「地方例録」にも、水腐地、新田場のある土地では字がなく一の割、二の割と分けて水腐地と水腐地でない土地とを組み合わせ配分したことがある。そのような部落共有地が一の割であると解している。

〔備後〕「日本の地名」によれば備後の名は備後國の伝播地名であるとしている。

⑨古老の語り伝えによると須賀組にある稻荷社が建歴のころ(一一二一年)建立され、その稻荷大明神の尊像にまつわる伝説によって備後と称するようになったと伝えられている。

〔大場〕大場とは広場の意味である。(「日本の地名」より)

〔大枝〕「オオエ」の当字で「大江」でないかと思う。大枝の地は近くに大泊があり、船渡の地名もあって古くに古利根川の乱流時代には川・沼等にのぞんでいたであろうと思う。「江」は必ずしも川であることを要しない。沼でもいいわけであるが、ここでは大川とみるべきであろう、と解している。

〔増田新田〕 「新編武蔵風土記稿」に「古へ大場・大島・中野・薄谷の四カ村に添たる沼あり土人大場沼と呼びしが宝永三年（一七〇六年）岩槻久保宿町の民増田彦右衛門といえる者、開墾せしによりかく唱う」と記していることで明らかである。個人の見立新田である。

〔中野・大畑〕 「新編武蔵風土記稿」に「中野・大畑の二村はもと大場村に属していたが年代は明らかでないが分かれしものという」とある。以上が埼玉県地名誌による。

すすきや
薄谷…この地名考、また開発の歴史は明らかでないが、古老の語り伝えによると村の中央に大川ありしとき、此処に木揚場があったという。昔建歴のころ（一二一年）であったと伝えられている。このことから推理して、大川ぞいに薄の繁茂していた地域を開発したので付されたものと考えられる。

〔大畑〕 大場よりわかれた年代は明らかでないが、広場の中で特に畠場として開発されたので付されたものと解する。

〔中野〕 大場と同様で広場と解するが、野とは（ぬの転じたもの）広さ、平地の意（大言海）で、地形的に推理すると大場と薄谷の中央にある平地から付されたと解する。

地名についてはなお研究を要す。